

茲こゝに説と出だすお話はなしは甲斐かひの國くには勝沼かつぬま生まれの俠客けやく祐天ゆうてん仙せん之助のすけでござ
 います抑おさ此この人ひとは修驗しゆけん者じやで祐天ゆうてんと云いつた法印はふいんでありますが此この者ものが博
 徒との群むれへ入はいつて俠名けいめいを轟ころかせ後年こうねん徳川とくがわさまの新懲組しんてうぐみへ入はいりまし
 て山本やまもと仙せん之助のすけと云いつて小頭こがしらまで勤つとめました者もので武藝ぶげいが出來できて膽力たんりき
 がありましたから鬼おにに鐵棒かねぼうと云いつたやうな男おとこでございます。處ところろ
 が今年ことね身延山みんげんの御會式おんあひしきの時ときの緞澤かじかさはの大喧嘩おほげんかより一時いんじ甲州こうしゅうを草鞋わらじを
 立退はかばけりや成ならんやうな事ことになりましたので津向つむきの文吉ぶんきち親分おやぶん及び
 一同いちどうの連中れんちゆうに一蓮寺町れんじやうてうで別わかれまして祐天ゆうてんは只ただ一人ひとり甲府かうふの山田町やまだまちの
 兩國屋りやうこくやう宇吉うきち親分おやぶんの宅たくへ久ひさんへにて歸かへつて參まいました宇吉うきちさん
 は驚おどろいて「仙せん之助のすけ何なにうした」「仙おやぶん親分おやぶん種々しんしん御心配おんしんぱいを懸かて濟すません

實じつは之これれ〜と喧嘩げんかの次第しだいを話はなしますと宇吉うきちは「ウム〜うか夫
 りや此間こゝ津向つむきの兄あにきからも聞きいたが多くの他人たにんに迷惑めいわくを懸かちやな
 らねへつて佐太郎さたろうを連つれて役所やくじよへ駈込かけこんだ其時そのときにな」と云いつて床
 の間まの刀やな掛かけから一腰ひとしを取り出だし「宇あに兄あにきが之これれを汝てめへ遺物いたみに遺
 つて呉くれつて置いて往いつた一腰ひとしだ汝てめへ渡わたそう」「仙おやぶんへエ是これや親分おやぶん
 津向つむきの親分おやぶんが自慢じまんの腰物こしもので法華ほつげ一條じやうまが正家せいけで使つかひ手てが津向つむきの親分おやぶん
 でけすから能よく切きれるそうです」「宇う道理だうりで研とがして置おいてくれと云いつ
 たから早速さつそく研とがせて置おいた。それで仙せん之助のすけマア兄あにきが自訴じそしたから宜が
 いわと云いつて汝てめへが在郷ざいこうと違ちがつて此府中こゝだ世間せけんの思おもわくも有あるか
 ら少すこしの間あひだ餘炎ほこほりを冷さして來こい」「仙おやぶんハアそりや仰おつしやるまで

いもございませんマア關東を一廻りして來ませう」宇「ぢや今夜は泊つて明日早く出立つ仕ねへ乃公が一ノ宮の萬兵衛の處へ手紙を付て遣ろう」仙「有りがとうごせへやす何分宜しうお頼み申まするれで青島の三吉兄いへお序がごせへしたら能く禮を申したと仰しやつて下さへまし」宇「宜しく」奥の屋の傳四郎だつて分らねへ男子ぢやねへから汝へ武州へ往つたら早速に詫手紙を一本出して置け」と

フシ「親分子分の情義は厚く 長脇差にて旅行なよ
廻し合羽を打ち纏ひ 素人の旅人の姿たして
歩行が宜いと何や彼や 前後の事まで差し圖し

て 夜の更けるまで酒を酌み 其夜は寢み明日
の朝 世間で起きぬ其の中に 此家を立ち出で
門口で 禮をば演て住み馴れた 甲府を後ごに
鶏が鳴く 東まの江戸を志る差し 石和を跡に
栗原や 轟く胸も勝沼に 晴れて嘶く駒飼の
手綱縮て馳登る 笹子を越て黒野田や 今日初
狩に出し野に 花咲みだれる猿はしを 架ても
渡る鳥澤や 犬目野田尻鶴川の 關所を後に上野

原 與瀨と吉野の二瀨越へ 渡れば登る小佛の
峠も長さ長房を 何時しか過ぎて八王子の 宿
に着して祐天は

武藏屋といふ茶屋で休み酒を取り寄せ飲みながら未だ馴れませぬ
道中でございますから種々と路筋の容子などを聞き糺しまして今
夜は日野の宿に泊ろうと勘定をして其茶屋を立ち出でまして日野
の河原へ掛つて來ました日も暮れて仕まいました今更假り橋を渡
ろうとするに頻りに聞へますは女の泣き聲…ハテなど祐天仙之助
は足を止めて聞き濟しまするとそれに相違ないので直に祐天は聲
を便つて來て見ると數の小蔭に五六人の乞食共が一人の娘を捕へ

て怪しかる事を仕やうとする形勢……

フシ見たる祐天仙之助は 憎くき乞食の振舞だご
怒かりの一と聲抜く手も見せず 法華一條正家
の 閃めく光ともろごもに 乞食の首は宙へ飛
ぶ 之れはと驚ろき逃げ行く奴を 跡追ひ詰て
又一人 肩より胸へ只一太刀 切つて捨てたが
其切れ味 始めて試して莞爾と笑ひ

仙「流石津向の親分が秘藏に持った此一腰宜い切れ味だなア乞食
二人打つた斬つたが骨さわりも仕なかつたせ」と正家の刀の刃を

改ためスツかり拭つて鞘に納め元の處ろへ返つて見ますと娘は亂れた姿を直して居りましたが仙之助を見て「娘誠にお蔭さまで危うい處を助かりまして有り難たうございました」仙「モン娘へさん危ねへことであつた併かし若い娘めが今頃此んな處を歩行なさるは了簡ちがへた何んな用があつたかは知らねへが…モン私たちが通ほらなかつたら飛んでも無へめに會のだ危ねへ…娘さんお前へ何處だへ」娘「ハイ妾しは八王子在中野村で法善寺前へ機織屋の吉兵衛の娘で梅と申者でございませうが今日日野に遠い縁の叔父がございまして其處へ據ころない用事がございまして参いつた歸へり路でございませう…」仙「へエそうかへそれにしても其叔父さ

んど云ふ人も何んぢやアねへか此んなに遅くなつたのに年頃の娘を一人で歸へすと云ふなア餘んまり分らねへ人だ併し人さまの事を此んなに云つちや濟ねへけれごマア此な處に居ちや仕方がねへ往來へ出ませうそれで娘さんの村は中野だつて其の中野と云ふのは何方の方だへ」娘「ハイ之れから八王子の路を参いりまして右へ入るのでございます」仙「そうかへ夫れぢや私しが途中まで送つて遣ろう」娘「有り難う存じます」之れより往來へ立ち出でまして祐天は此娘を送くりながら段々と容子を聞けば哀れな話し

フシ「抑々中野の織屋吉兵衛は 可なりの身代機織も 十四五人を抱へ置き 盛んに營業仕て居た

が 娘の母が病氣付き 醫者や藥りの手當して
 厚つき看病の効もなく 終ひに冥世の人となり
 茶毘の煙りと消へたる跡は 取り締りなき家の
 中五十男の吉兵衛が 淋しき寢屋の徒然に 屢
 々通ふ八王子 横山宿の茶屋女 おちかと申て
 二十七 之れを引入後妻に 直をした父の了簡
 ちがい 未だ年若なおちかゆへ 機織女工と云
 ふ事聞ず 家事の締りは其方のけ 朝から使妻

楊枝 化粧に費やす二三時間 跡は晝寢と小本
 よみ 猫のお守りで日を暮らす 夫が高じて此
 頃ろでは 一の宮の萬兵衛が 身内の者で野狐
 傳次 一寸と小意氣で色白ろで 三十二三の勇
 み肌 夫れを引込み痴話狂ひ 主夫の不在を僥
 倅に 斯る始末を見て居る娘 親父に密告れば
 忽ちに 家に風波の逆まくを恐れ 居るを付込
 んで 或る時き父が歸つて來て 寢酒を飲んで

寐た其夜 突然頓死に驚いて 醫者を迎へた其
 時は 最う時遅れて甲斐もなし 怪しき父が病
 死であれど 證據がなければ是非もなく 野邊
 の送りを仕た後ちは 毎夜の如く野狐の 傳次
 を引入憎つくい始末 餘りの事の口惜さに 親
 の仇を討ちたいと 其相談に日野宿の 叔父に
 話せば無證據は役に立ぬと斷わられ 力らなく
 泣く歸り路 不計會ふた災難を お救い下ださ

い忝けなしと 聞いた祐天仙之助は 思わず握
 る兩手の拳し

仙「そうかへ娘さんの話しを段々と聞て見りや他人の私しさへ實
 に口惜いが親父さんの仇を討たへと思ふのは最ともだ併し其叔父
 さんといふ人も不實だなア證據ねへからつて打捨て置いていのは酷
 いや」娘「それが何んでございます一の宮の博奕打の子分ですから
 後の難義を思ひますので」仙「お梅さんお前は何歳だへ」梅「ハイ今
 年十六でございます」仙「十五や十六で男子と違ひ女でありながら
 其志しを起すと云ふなア感心だ宜しく己れも男子だ聞き捨に
 は出来ねへ袖摺り合ふも多生の縁蹟く石も縁のはしとやら云ふが

お前を助けたも何にかの縁だ己れが助け太刀をしてやるから案内をお仕し：一の宮の萬兵衛親分だつて分らねへ人ぢやねへ己等も手紙を持つて一の宮へ行く途中なのだ其傳次の野郎を取締りや白状するに相違ねへからお梅さん安心をし」と云ひ聞かすればお梅は喜びまして之れより案内いたしまして中野村へ來ました時は

フシ「冬の夜ながら更け渡り 遠寺の鐘の告るを聞

けば 早や九ツか時刻もよしこ 祐天前後の始

末を考へ

仙「お梅さん名主さまの宅は何處だへ」梅「ハイあの先きに黒塚が見へます彼方がそうでございます」仙「そう：宜し之れがお前への

宅だね娘が家出をしたと云ふのに大層シンとして居るぢやねへか大した住居だね」梅「ハイ之れが織場でございます此園の中が住居になつて居りますので」仙「なるほど此う離れて居ちや何にを仕たつて分からねへそれで彼奴等の寝て居る處は何の邊だね」梅「入りますと直ぐ庭で扉を一ツ越へますと其處の座敷でございます」仙「それぢやお梅さん私しが大きな聲を出したらば直ぐに名主の治太夫さんの宅へ驅て行つて其治太夫と云ふ人を一緒に連れて來るんです宜いかい」梅「ハイ宜うございます」

フシ「此處に手端も定まりて 忍び込んこ仙之助

四方を見れど嚴重な 圍ひの扉は彌高く 入る

へき所^{ところ}も見^みへざりしが 幸^{さい}はひ此^{こゝ}處^いに一^{いち}輛^{りょう}の
 荷^に車^{ぐるま}のあるこそ丁^{てう}度^どよしこ 兩^{りやう}輪^{りん}を外^はして當^{たう}座^ざ
 の楷^こ子^こ 音^{おと}せぬやうに扉^{へい}に掛^かけ 廻^{まわ}し合^あ羽^はを卷^ま
 き着^{つけ}て 忍^{しの}かへしを引^ひき壊^{こわ}し ヒラリこ中^{なか}へ飛^と
 下^{くだ}りて 四^あ邊^{たり}を見^みれば盆^{ぼん}栽^{ざい}を 並^{なら}べし棚^{たな}や四^よツ
 目^め垣^{かき} ソツこ上^あつた履^{くつ}脱^{だつ}石^{いし} 耳^{みみ}を澄^{すま}して容^{よう}子^すを
 聞^きけば 内^{うち}には男^{だん}女^{ぢよ}の鼾^{いびき}の聲^{こゑ} 奸^{かん}夫^ふ姦^ふ婦^くは熟^{じやく}睡^み
 の體^{てい} 雨^{あま}戸^まに手^てを掛^かけ開^あんこすれご 締^しり^まの堅^{かた}

いをこじ開^あけて 椽^{えん}へ上^ありて障^{しょう}子^じの内^{うち}を ソツ
 と覗^{のぞ}けば有^{あり}明^{あけ}の 灯^{あか}影^{かげ}に見^みゆる二^{ふた}人^{たり}の寢^ね姿^{すがた} 障^{しょう}
 子^じ引^ひ開^あけ仙^{せん}之^の助^{すけ} 憎^{にく}さも憎^{にく}くしこ足^{あし}を上^あげ 奸^{かん}
 夫^おの頭^{あたま}も碎^{くだ}くるばかり 起^おきよご一^{ひと}聲^{こゑ}蹴^お付^{つけ}れば
 何^なんぞ堪^たらん野^り狐^{ぎつね}は ハツと愕^{おど}ろき起^お上^あがるを
 刀^{かたな}の裏^{うら}刃^はで背^せ筋^{すぢ}の中^{あた}り 力^{ちから}任^{まか}せに打^うち据^すへられ
 傳^{でん}次^じはウ^うンと仰^の反^{はん}つて 其^{その}儘^{まま}真^ま處^{ところ}へ氣^き絶^{ぜつ}の様^{やう}子^す
 おちかは驚^{おどろ}き人^{ひと}殺^{ころ}しこ 云^いはんこするを仙^{せん}之^の助^{すけ}

亭主殺しの大罪人 其處動くなご一脚あげ ウ
 ンこばかりに踏み付られ グウの音も出ぬ姦婦
 のおちか 祐天有合細帯取つて 奸夫姦婦の兩
 人を 高手小手に縛上げ 傳次が脊筋を割下げ
 て エイこ入れたる秘術の活法 我れに歸つた
 野狐が キヨロつく横面張付て
 仙「ヤイ汝へは野狐傳次と云ふのか此嬢アと姦通して亭主の吉兵衛を殺したんだなツ」傳「ドウ何ういたしまして夫んな覺は更にご
 ざいません全く病死でございます」仙「ダマレ汝へが幾ら偽はつて

も無駄だ云はなけりや身體から聞くぞツ」傳「全たく存じません」
 そうかそれなら己れが仕方がある」と仙之助は行燈の傍はらにあ
 る手燭を燈まして佛壇を探し當て線香を一把取り出しそれに火を
 付て机を持ち來つて新しい位牌は吉兵衛だろうと見ると十一月二
 十日としてございますそれを机に備へ 仙「サア傳次云はなきア云
 ふやうにして云はせるぞ」と祐天は燃へて居る線香を傳次が鼻の
 頭へ押付てジリ／＼鼻焼を始めましたから堪らない 傳「ア、熱い
 ーア、熱いア、」仙「ヤイ未だ汝へ吐かさねへか之れでもか／＼
 か」と頬邊或は額ひ等へ中られますので愈々堪らないけれど中
 々云ひませんソコデ仙之助は手を變へまして今度はおちかへ活を

入れて 仙「ヤイおちか汝へは大恩のある旦那を殺したに相違な
 ろう白状仕ねへと責るが何うだ」近「ハイ妾しや……」仙「妾しやが
 何うしたんだサア云はなけりや此うだが何うだ」と亦たも線香を
 おちかへ當てましたから近「ア、熱い云ひます〜ハイ申上ます」
 仙「サア云へ」近「ハイアの妾しは大恩のある旦那でございませうか
 ら殺すのはいやだと云ひますと傳次さんが云ふには殺して仕まは
 なけりや枕を高く寝る事が出来ねへと申しまして當身とか申者で
 旦那を殺したのでございませう」仙「ウムそうか宜く白状したモシ吉
 兵衛さんおまはんは位牌となつて仕まつて居ちや仕方がねへが併
 かし魂白は此世に残つてゐるなら之れで淨みなせいまし今お前様の

娘が来るだろうから：ヤイ傳次吾りや口を開ねへな相手のおちか
 が白状した上は別に聞くにも及ばねへから之れから汝へを擲り殺
 しにするから然う思へ」と仙之助は傳次を裸にいたしまして之れ
 から徐々と料理に掛ろうとしまする處ろへ表ての戸を烈く叩きま
 して奉公人を起し戸を開けさせて這入て來ましたは名主の治太夫
 が當家の娘お梅の案内で奥へ這入て參りました仙之助は之れを見
 ると仙「お梅さん彼のお方は梅「ハイ名主さまでございませう」
 仙「コレハ旦那でございやすか私ちや甲州勝沼の者で仙之助と申
 者でございませうが今晚此家の締を壊して這入ましたは當家の娘の
 お梅さんの許しを受たとは申ながら御法を破つて相濟ません今日

不計も日野の河原でお梅さんをお助け申てお話しを聞きますと誠に
 にお氣の毒な次第で遂ひ聞き捨てにいたし兼たもんですから此
 んな事になりましたんで「治」コレは初めてお目にかゝりました私
 しは名主の治太夫ですがお梅坊が難義をお助け下すつたそうであ
 り難くお禮申上げます就ては當夜は種々御骨折下すつて誠に忝け
 なふございます其れでは二人をお受取り申します「仙」モシ旦那へ
 只今調べました處ろが此傳次と云ふ奴が殺したのでおちかど云不
 貞の女は同意したただけだそうで此傳次のやうな悪者を突出します
 と夫れが爲に引合を受け迷惑をする者が澤山在りませうから之れ
 は娘のお梅さんに仇討ちをおさせ申した方が宜かろうと思ひます

で跡の處ろは旦那のお手の内で宜しくお取り計らいをお願い申し
 ますでございます「治」成るほど跡の處ろは宜しうございます左よ
 うですかそれでは料理の支度に掛りませう」と

フシ「祐天の仙之助は 傳次を庭へ引出だし 薪を

積で火を焚着け 傳次の兩足夫れへ入れ 生き

ながらの半火葬 如何に強情な野狐でも 尻尾

出さずにや居られねへ 遂ひに堪らず吉兵衛を

殺した事を白状すれば 其れで宜くて仙之助は

傳次を此方へ引きずり來たり

で跡の處ろは旦那のお手の内で宜しくお取り計らいをお願い申し
 ますでございます「治」成るほど跡の處ろは宜しうございます左よ
 うですかそれでは料理の支度に掛りませう」と

フシ「祐天の仙之助は 傳次を庭へ引出だし 薪を

積で火を焚着け 傳次の兩足夫れへ入れ 生き

ながらの半火葬 如何に強情な野狐でも 尻尾

出さずにや居られねへ 遂ひに堪らず吉兵衛を

殺した事を白状すれば 其れで宜くて仙之助は

傳次を此方へ引きずり來たり

仙「サアお梅さん今お聞きなすつた通り此傳次が殺したに違ひないのでサア仇きをお討らなせへ」梅「有り難うございます親父さんの仇……」

フシ「一心凝たる孝子の一念 亡父の遺物の一刀をスラリと抜いた少女のお梅 突かんごするを仙之助

仙「お梅さん一寸お待ちなせへ：オイ傳次汝がやうな奴は無職渡世の風下にも置けねへ双だ汝へも一の宮の身内であれば無職仲間の法は知つてるだらう己等達仲間の禁物は盗賊と欺偽と姦通だ此三ツは仕ちやならねへと盃をする時に固く云ひ渡されて居だらう

にそれを汝が此んな事を仕やがつたから汝への素首は一の宮へ土産に持つて往から其う思へ：お梅さん此奴の頭へ疵を着ちや不可ねへよ」サアお遣んなせへ」

フシ「ハイと答へて孝子のお梅 切込一刀傳次の肩

先き 一寸計り切り込めば 之れではいかんこ

脇腹や 手足肩先き腰車 少女の小腕で一二寸

死ぬほご深く切り得ねば 傳次は手傷に四苦八

苦 之れを見て居る姦婦のおちか 我身も今に

此通り される事かご氣が氣にあらず 口に唱

る念佛ねんぶつや 心こゝろろ念ねんずる神佛かみほとけ 如何いかなる御利益ごりやくあるやらん 祐天ゆうてん聽やがて聲こゑをかけ

仙せん「お梅うめさんモウそれで宜よかろうサア之これれから私わつちが首くびを切きろ
う」仙せん之助のすけは傳次でんじの後うしろへ廻まわり首くびを打落うちおとしまして 仙せん「御宅ごちやに油あぶらつ
紙かみが一枚まいございませうか此この西瓜すいくわを包つんで參まゐへるのでございませ
が「梅うめ」ハイございませうともコレ誰たれか居かませんか」と女中じよちゆうを呼よ
び油紙あぶらかみを取り寄よせまして仙せん之助のすけに渡わたしまして祐天ゆうてんは首くびを包つんで身み
支度じたくいたしました名主なぬしの治太夫じだゆうに跡あとの事ことを頼たのみまして
フシ「然しかば御免ごめんを蒙かうるこ 暇いとまを告つげて別わかれ行ゆく 袂た
ご取とらへて少女せうじよお梅うめ 別わかれを惜おしみて言葉ことばなく

涙なみだだに包つむ厚あつき禮れい ホンほんの寸志すんしの松まつの葉はこ 言い
て差さし出だす志こゝろざし

仙せん「イヤ有あり難がたうござやすがお梅うめさんそりや御辭退ごじたいいたしやせう
お志こゝろざしだけ頂いたきます」治ち「モシ仙せん之助のすけさま此この娘こが節角せつかくの志こゝろざしで
ございますから受うけて遣やつて下くださいまし私わたくししからもお願ねがひ申まま
す」仙せん「然しかう仰おつしやられては誠まことに恐おそれ入いります然しからば頂戴てうたいいたしま
す」ど

フシ「中なかは幾許いくちか白紙しろかみに 包つんで出だしたを受うけ收たまめ
暇いとまを告つげて立たち出いる 時ときに東ひがしの空明そらあかく 明あけぬ

と告ぐる群鳥 飛び行く先きは一の宮 此處は
武州の多摩郡

此萬兵このまへびといふ親分おやぶんは小金井こがねいの小次郎親分せうじらうおやぶんの兄弟分けうだいぶんで百餘名ひやくよめいの子分こぶんを持ちまして武州ぶしうで屈指くつきしの顔役かやくでございます今奥いまおくで子分こぶんを對手あひてに酒さけを飲んで居をります所ところへ一人ひとりの若い者ものが ○親分おやぶん今甲州甲府いまこうしうかうふの若わかへ者もので仙之助せんのおすけと云いふ者ものが御挨拶ごあいさつは御跡おあとにして先さきへ親分おやぶんさんに御目ごめに掛かけてくれつて手紙てがみを持つて參まりやした」萬「ウムそるか」と云いつて名宛なまてを見みますると三井みつゐの宇吉うきちからの手紙てがみでございます萬兵衛まんべゑは開ひらいて一讀ひとよいたしまして 萬「之こりや兩國屋りやうこくやから手紙てがみを添つてよこした祐天仙之助のうてんせんのおすけと云いふ若わかへ者ものだ此方こつちへ通とほしな」と之これより

仙之助せんのおすけを丁寧ていねいにして奥おくへ案内あんないをいたしました」萬「サア客人きやくじん此方こつちへ」仙「コレは親分おやぶんさまでございませうかお友達衆ともだちしうへは暫しばらく御免ごめんを蒙まかむりまして私わたくしは宇吉うきちの身内みうちの者もので仙之助せんのおすけと申まします不恙ふたい者ものでございませうが何卒なにぞぞお引立ひきたてをお願ねがひ申まします」萬「ア、兩國屋りやうこくやさんにも久ひさしく遇あはなへが例いっも御繁昌ごはんじやうで結好けつこうだ」仙「有り難ありがたたう存ぞんじます」萬「歟か澤かさわの間まちがいから此方こつちへ來きなすつたのか」仙「ハイ」萬「そりや嘸さぞ苦勞くろうを仕しなすつたろう」仙「有り難ありがたうございます就つては親分おやぶんさん初はじめて上ありました仙之助せんのおすけがお土産みやげでございます」とそれへ差さし出だしました紙包かみづみ 萬「ウム何なにんですか」と萬兵衛まんべゑは引寄ひきよせて開ひらいて見みると傳次でんじの首くびで 萬「エツ之これはッ」仙「エーお身内衆みうちしうの野狐のぎつねの傳次でんじと

云ふ人でござへやす」○「ヤツ之れや傳次の首ッ」と居合せた子分
 が立ち上ろうとするを 萬「騒々しい待てッ：斯う云ふ因縁がある
 から客人が挨拶は暫く待つてくれと云つたぢやねへか何う云ふ事
 か其次第を聞て後の事だ騒ぐなへ：エ、客人是れにや何にか入り
 組んだ仔細が有るだらう何う云ふ事か聞きやせう」仙「流石名代の
 大親分、能く仰しやつて下さへやした」之れから中野村の一件を
 委細に話しをいたしましたから萬兵衛もハタと小膝を打ち 萬「客
 人は流石三井や津向の仕込み丈あつて其仕事には感心した宜う遣
 つて下だすつた成ほご此野郎は俺の子分には違へはねへがお話の
 通りの不始末者だから歸へつて來たなら處置を仕やうと思つて居

たんですがそれぢや機屋の主人を殺たんですかへ憎い野郎だ能く
 殺つて下だすつた此野郎の爲めに俺の名前まで汚される處ろ誠に
 有り難うございましたとお禮を申す」仙「親分さんに然う云はれや
 しちや面目ござやせん」萬「イヤ何うして宇吉さんから手紙を持つ
 て來なすつた客人だから身内の者も同様でそれなればこそ此野郎
 を切つて下たすつたのだ皆んなにもそう云つて置くが傳次の仇だ
 なんて心得違ひの者もあるめへけれど決して其んな考を持つちや
 ならねへもし不利屈を吐かす奴は俺が承知を仕ねへぞ：就いちや
 此野郎も首になつて仕まへば罪はねへから埋めて遣れ」と之れか
 ら改めて仙之助より一同へ挨拶を述べまして萬兵衛は仙之助の氣

質を悦んで又無き者と思つて居りますと仙之助も安心いたしましたし
 て
 フシ此處に逗留する中に 何時しか年も暮れ行き
 て 其翌年の春よりは 運が向てか仙之助 何
 れの賭場の博奕も 程よく勝利を占るゆへ 金
 の廻るに従びて 目下の者を貢で遣れば兄き兄
 きご尊敬られて古い身内の者よりも 用いられ
 るを妬むもあり 時しも丁度五月節句 武州で
 名代の六社の祭り 首尾よく祭りも相濟で 翌

日七日は勘定博奕 宿は府中の田中屋で 何れ
 の盆も盛りたる 中に五宿の政五郎は 重なる
 敗に此處彼處と 不義理だらけに仕た上句 盆
 に文句の作り文字 早くも讀だ祐天が 盛かる
 博奕を止めてはならずご 誘ひ出したる麴屋で
 飲だ歸へりが竹鎗の 馳走に相成一段は 此後
 に委しく伺ひます

祐 天 仙 之 助 終

佐原喜三郎

浪花節俱樂部口演

フシ世の中の意氣な浮世を今此處に 三筋の糸の
 世渡りや 花も香も美しき 色も變らぬあざみ
 草 心ろに含む針ヶ崎 佐原の神に崇ある 成
 田の菊と芝山仁三が 待つことも知らぬ喜三郎
 通りか、つた松並木 互に争ふ劔の舞ひ 闇を

あやなす鳥羽玉の 中を遁がれて喜三郎が

再び芝山へ引返す一談

エ、此喜三郎と云ふ人は下總佐原の向津の穀屋平兵衛と云ふ者の
 義子でございませうが實母が穀屋へ後妻に這入まして平兵衛との間
 だへ出産しましたのが平助と申ので喜三郎は連れつ子であります其
 れ故へ平助へ義理を立て、自分は家出をしまして土浦の皆次の子
 分となり博徒の群れへ交りて男を磨き古郷の佐原へ歸つて賣り出
 したのでございませう此等の者は非常に不動さまを信心しますが何
 にも不動尊と云ふ佛像は在りますものゝ利益が在るや無きやは其
 人々の信心に任せるとして此喜三郎も信仰者の一人で九月二十八

日でございます成田の不動さまを参詣しまして護摩を上げ其れから毎度寄付の海老屋へ上り酒を飲んで居りますと直ぐ上の三階座敷で非常に男女の争ふ聲が聞えます 喜「オイ〜姉さんやオイ〜」女「ハイ親分さん何うも相済みませんお客さまが立て込んだもんですから遂にお構ひ申ませんでサアお酌いたしませう」喜「何アに忙がしいのにお酌などは仕なくも宜よ：彼の何時のお虎が見えねへちやねへか」女「ハイお虎さんですか彼娘が今困つてるんですよ」喜「何うして」女「アノ今二階でね：ソラあの聲が然うなんですよ」喜「彼りや何んだへ」女「親分さんそりや斯なんですよ此宿の馬差で菊藏さんと云ふ方なのですがお虎さんが今度銚子へ行

ふてへ話しが極まつた明日立たうと云ふのですがお虎さんが菊さんにお金の借りがあるんですがそれがね：五兩の證文が五十兩になつて居ると云ふ争ひなんで其れだから浮かり口は出せませんでね困つてるんでございます」喜「フム〜そうか其りや氣の毒だな」フシ「話しを聞いた喜三郎が 人の難儀を聞き捨てに 出来ぬ氣性の俠客 容子は如何に喜三郎が 上る二階の段階子 ソツと忍んで聞くことも 知らず 聲振り立て菊藏が お虎の髻さ引摺み 打たんこなすを喜三郎 たちまち唐紙押し開ら

喜「お待ちなせへ親分さん何う云譯か私は未だ知りませんが高が知れた對手は女マア親分が手を卸すまでもごせへすまい」と其拳を押さへました菊藏は之れを見て 逸「ヤイお前ちの出る幕ぢやアねへや引込んで居ろへ何んだ手前は」喜「誠に相濟ません私ちや不動さまを參詣に來やした佐原の喜三郎てへ者でござやすが下の座敷で一杯飲んで居りますと此話し實は氣の毒に思つて之れへ這入やしたので親分誠に失禮でござやすが何うかお任せをお願へ申やす」菊「エーそうでござへすか貴殿は佐原の喜三郎さんで私ちや菊藏てへ者で始めてお目にかゝりやす…何に私ちだつて女なを取

捕へて打ちたかアねへが此虎が人を愚に仕やアがるから勘辨が出來ねへと云ふものは私ちや此女に五十兩借しがありやす其れを催促する譯ぢやがんせんが此女なが今度銚子へ往くの私ちへ何んの話しもなく剩さへ催促すりや五兩だと吐しやがる實に太い駄女です其れぢやア喜三さんの前へだが勘辨が出來ねへぢやがんせんか「喜なるほご」喜「否へ何うぢやないんですよ佐原の親分さん聞いて下さい斯うなんですよ妾しや五兩しか借りないお金が五十兩の證文になつてるんですもの」菊「何にツ横着な事を吐かすなへ五十兩借したから五十兩の證文に成つてるんだ」虎「いゝへ五十兩なんで借りるもんですか五兩しか借りませんよ…人をツて五十兩

になんて「菊」エ、女たが未だそんなこと「喜」マア〜マア：五兩
と五十兩のまちがい世間にや之りや澤山ありますお話しで其證文
と云ふなア：へ、なるほど之れでござやすか：なるほど五十兩
ですな：五十兩は五十兩に違はねへが此の五と十の字の間が：あ
虎さん之りやお前さん書なすつたんだね「虎」ハイ妾しが書たんで
すは何にね親分さん斯う云ふ譯けなの：此七月の十五日に子妾し
や不動さまへお参りに行つた時にネ餘處へ遣らなけりや成らな
いお金をスリに取られて困つてると菊さんが来て何したと聞か
實は之れ〜ですと話したら菊さんが其りや困るだらうぢや私し
が借して遣るつて五兩借てくれたんですケレども何んの中でも金

錢は他人だから一寸印しを書が宜いと申ますから其れで妾しが書
きましたんで五兩に相違ないんです「喜」時に菊藏さん此争ひを
何時までして居たつて果てしが盡ませんで：斯う一ツ願ひ度いも
んで貴殿も成田の菊藏親分：高が知れた旅藝者を苦しめた處ろが
男にも成れますまいから思ひ切つて三十兩呉れておくんなせへッ
コでお虎さんだがマア菊藏さん何うでござやせう今此證文を宿役
場へ持ち出しや墨色調べのあることア知れてます其んな面倒なこ
と爲よりか私ちに三十兩呉れておくんなせへ其禮は貴殿が佐原へ
お出なすつた時きア確といたしやす何うでござやせう「菊」宜うが
んす貴殿に上やせう「喜」有り難うござやす就はお前さん五兩お出

しなさい」とお虎から五兩出せた喜三郎は酒肴を取り寄せマア一ツと菊藏に飲ませ喜ソコで菊藏さん此處に十兩ごせへすが跡の十兩はお虎の髪も此通り亂れましたから頭を打つた打たれ賃と髪結錢にお貰ひ申て置やすサア何うか召し上つて…此書附は斯う燃て灰にして仕まいませう」と

フシ「バツと燃したる證文の 煙に卷かれた菊藏は飲まぬ先きから酔ふたる如く 先づ足元の見えろうちこ 暇を告げて立ち出る 海老に因んで曲りたる 心ろも太い馬差菊藏 通りかゝつた

小料理屋の 一階で招く吉田屋の 客は芝山仁三郎

仁「オイ菊何處へ往くんだマア上れ」菊「ア芝山兄いかウム上ろう」と菊藏は二階へ上りました仁「菊何にをぼんやりして居んだ」菊「何にのぼんやりする譯ぢやねへが今日海老やの二階で之れくよ何んだか喜三の野郎に馬鹿にされたやうな」仁「そうか其りや汝へが喜三に馬鹿にされてるのよ併し此方元より善筋でねへから仕方がねへとして喜三の野郎が海老屋に居のは幸わいだ彼の野郎を簀巻にして皆次の宅へ投り込んで己等が皆次に打れた時の意趣返しをして遣れ菊支度を仕ろへ」菊「よし合點だ」と

フシコ二人は直ぐに吉田屋から家へ歸つて子分を
 集つめ先きへ廻つて臺宿に續く並木の針ヶ
 崎網を卸して待つことは知らず此方は佐原の
 喜三郎馬差菊が歸つた跡で此宿に居ては後
 日また彼の馬差の菊藏が如何なる難題云ふ
 かも知れず當所を早く立ち去つて銚子へ行
 くが宜かろうよ私しは佐原へ歸へり路一緒
 に送つて上ようご云はれて悦ぶお虎母子夫

れでは何うか願ひますご直ぐに支度も調なふ
 て暇乞して立ち出づる海老屋の表に三挺の
 待たせた駕籠に乗り移り秋も暮行く菊月の
 朝露深き芝山道襪縷刺てう針ヶ崎樹立の
 蔭よりバラくご顯われ出たる四五十人行
 手の路を取り切たり

身「旦那ア大變だ合棒…」合「何んだく喧嘩の待伏か」喜三郎
 は駕籠の中より見ますると昨日海老屋で會つた馬差の菊藏が直先
 きに居りますからサては昨日の扱ひを不足に思つて此處へ出張て

喧嘩を仕かける積だなど悟りました故喜三郎は駕籠から下りまし
て喜阿母さんもお虎さんも之れから大宿へ引返して他の路から
銚子へ往きなせへ私ちや彼の通り成田の菊藏が待つて居るから之
れから勝負を仕なけりやならねへオイ駕籠やさん此二人を頼むせ
ソラ駕籠賃だよ」と一兩駕籠やに渡しましたがお虎母子は其處を
去り兼ねますを無理に喜三郎は引返へさせまして先づ之れで宜い
自分も充分支度を仕まして悠々と進んで参ります……菊藏は進
んで來まして菊「オイ佐原の貸元昨日は種々御厄介になりやした
併し貸元おまはんの扱ひは氣にや入らなかつたけれども直ぐ其處
で斷つたら和主の顔を丸る潰しにするやうなもの夫れ故一旦は承

知したが今日改めて達入れを仕やうと思ひ和主の來るのを待つて
居たのだ」喜「そうでござへすか併し男子が一度承知をした其扱
を不足と思ひ絢を戻すと云ひなさりや夫れまでの事賣込む喧嘩を
買ぬは卑怯及ばずながら相手になりやせう」と云ふ處へ芝山の仁
三郎が出て「仁私ちや芝山の仁三郎でござやすが土浦の皆次どん
の一子分で佐原の喜三郎さんでござんすかお前さんの親分皆次ど
んにや先年私ちや水を吞せられた其返報に弟分の菊藏が事の纏れ
を僥倖に和主の身體を簀卷にして皆次の宅へ投げ込む積りだから
夫う思つてくんなせい」と

フシ「聞いた佐原の喜三郎は 扱ても卑怯の此奴等

め 子分を大勢引連れて 只た一人の喜三郎を
 責め殺さうとは憎い奴 何程の事あるべきか
 長脇差の切れ味を 見せて遣らんご喜三郎 後
 ごへ下がつて禪きを掛け 引抜白刃は無名の祐
 定 イザ来い懸れご大上段 切り込む劔は八相
 下段 横に拂へば飛び退去り 退れば突入る千
 變萬化 獅子奮迅の勇戦は 左ながら猛虎の群
 羊を 狩れる如きの働きも 勢い此處に極まり

て 石に躓き思はずも 踰越處ろを後ろより
 足を拂はれ何に堪らん 無念ご云ひつゝ倒れた
 を 乗かゝつたる大勢は打つやら蹴るやら叩く
 やら 半死半生の喜三郎を 簀巻きになして勝
 鬨作り 之れを擔いで芝山の 仁三が宅へご引
 上げたり

お話し變つて大宿の立場茶屋へ来て様子を待居りましたお虎母子
 の者でございませすが佐原の貸元は何うしたか知らと頻りに氣を揉
 んで居る所へ這入て来た駕籠昇が 昇「今針ヶ崎の並木を通つた

ら喧嘩の濟んだ跡よ」女「へーそうかね喧嘩があつたかね忌やだこ
と」男「夫れがさお前へ只た一人の男を二十四五人で打た上に簀巻
にして擔いで行く處ろを見たが酷い事をするもんだなア」女「へー
可哀さうにまア何處へ擔いで行たんだらう」男「おらア見たらア皆
んな芝山の子分衆て仁三郎親分も居ただあよ」と

フシ「駕籠昇の話しを聞いて居た お虎母子が胸の
中 其驚ろきは如何ばかり 世の中に神も佛も
無いものか お不動さまも聞こえません 只た
一人の喜三さんが 其んなに爲れるを助けぬこ

は 日頃信ずる甲斐もない 餘りご云へば不動
さま妾しや御恨み申しますご 人目を兼ねて忍
び泣き 同じ思ひの母親も 涙だに濡るゝ兩袖
を 絞り出しお虎が考へ

虎「アノ駕籠昇さん」男「へー」虎「芝山まで二挺急いで遣つて下さ
いな」男「へー宜しうがんすオイ合棒芝山だ大急ぎ」男「よし…支度
は宜いせ」男「へーお客さま御召しなすつて」 虎「夫れぢア阿母さ
ん兎も角…芝山まで行きませう」母「お虎芝山まで往つて何うする
の」 虎「マア何んでも宜いから一緒にお出よ」とお虎は駕籠を急

がせて芝山へ参りました山田屋と云ふ旅宿へ着きましてお虎母子は奥の六疊へ通りましたが早速硯を借り受けまして「アノ姉さんお膳を一せん先へ出してくださいな急に用達しに行く者が一人ありますから…其れで阿母さんごせん食べて手紙を持って八日市場の倉田屋文七さんの處まで行つて下ださいな」母「アイよ何れ籠で」虎「そうともね…オヤ姉さん憚りさま…夫れでお湯があらいたら知らして下さいな」女「ハイ畏まりました」虎「夫れぢや阿母さん此手紙だからね…親分に逢つて能く喜三さんの事を話して下さいよ」母「アイよ夫れじや行つて来るよ」と母親は駕籠を急がせ八日市場の倉田屋を差して参ります此方はお虎は湯から上

つて座敷へ來ましたが「姉さん一寸眉毛を剃たいんですが髮剃を借して下ださいな」と女中より髮剃を借り受け酒を申付て膳の上で飲みながら「虎「姉さん仁三郎親分のお宅は何の邊ですか」女「ヘイアの親分さんのお宅は之れから五軒目でございます此處からも屋根が見えますでございます」虎「さうですかチヨイと何處…」女「ソラ彼す處でございますよお見えになるでせう跳釣瓶の木がありませんか」虎「アノ今日親分の宅へ何か擔いで來やア仕ませんか」女「ヘイ何んだか簀卷にした者を擔いで参りまして此處から見へますアノ物置へ入れたさうでございます」虎「さうですか」と

フシ「其れこなくお虎は下女に容子を聞き 豫て心
 ろに計畫した用意も茲に行届き 時刻の來るの
 を待ち居たり 既に其夜も四ツ過ぎて 宿屋の
 客も寢に就く 時刻は宜しご大膽にも 御虎は
 身支度調て 忍び出たる宿屋の裏口 袈裟を高
 くはしより揚げ 裏道傳ひに仁三郎が 裏の押
 戸へ手を掛けて 押せば幸ひ締りもなく 開い
 たは神の御助か 心ろに念ずる不動尊 何うぞ

首尾能く喜三さんを 助け出せて玉われご 一
 心不亂に祈りつゝ 忍び入りたる裏庭の 樹立
 の蔭に身を潜め 様子を見れば大勢の 子分は
 酒宴の眞つ最中 語るを聞けば明日は 彼れを
 擔いで土浦の 皆次の宅へは日暮れ方 表て口
 より投込んで ドツと笑つて引揚げん 左うよ
 くご手を叩き 笑ひ喜こぶ面悪さ 此間に徐
 々拔足して 忍び寄たる物置の 大戸に手を掛

け少しづゝ音せぬやうにソツと開け忍び入
りたる物置の中は眞ツ暗烏羽玉の物の分ら
ぬ其中を探りくゝて手に障る物は確かに簀
卷の様子お虎は密かに悦こんで豫て用意の
髮剃を取つて簀卷の細繩を切らんこ爲した
る其折から

○「ヤイ物置を見廻つて來ねへ油断は大敵だせ」△「大丈夫だ何に
が來るもんか」○「そうでねへせ氣を付ねへと不可ねへよ」と云は

れて子分の下等が灯燈も點けずに踰跟しながら二人連れで物置を
見廻りに遣つて参います

フシ「此時お虎は此聲聞いて此處ぞ生死の命の瀬

戸際 南無大聖不動明王 金加羅勢多加兩童子

其他の三十六童子 此大難を救はせ玉へご一

生懸命に念ずれば 前まで來たつた二人の者は

○「何うだ物置は：何んともなからう」△「何んともあるものか大

丈夫だへ：何んとも無いと澁面つくり」△「グーイブー飛んだ千松だ

アハ、、、」○「之れで宜いや行こうく」と

フシ「二人は其儘立ち去つた 跡にお虎はホツト息
 き 胸撫下ろして不動を拜し 之れより繩を切
 り解き 夢中の喜三を肩に擔ぎ お虎は力らの
 有る限り 喜三を背負ふて逃だす 其恐ろ
 しき大膽は 男子も及ばぬ度胸なり お虎は漸
 り裏口の 切戸の外まで遁れ出て 今一際の辛
 抱こ 足に任せてヒタ走り 走つて此所も宿外
 れ 駕籠屋のあるのでホツと息き

虎「モシ駕籠屋さん：今晚は」昇「へー何んでげすか」と「アノ濟
 ませんがね駕籠を一挺八日市場まで遣つて下さいな病人ですが」
 昇「へー八日市場は何處へお出なさるんですへ」と「アの倉田
 屋の親分の處まで」昇「へエ私ちどもは八日市場から今歸つて來た
 處ですお客は御病人ですつて」と「ハイ親分の弟さんで」昇「そら
 でござへすか」と「駕籠屋は駕籠を門口に置いて自分達の身支度を仕
 て外へ出て見ると駕籠が見へねへ籠屋は驚いて 昇「オイ／＼駕籠
 が見へなくなつたへ此いつは不思議だ」 虎「駕籠さん駕籠は此處
 にありますよ最うお客は乗つてますよ早く遣つて下ださいな」籠
 屋は二度喫驚 昇「最うお客さま乗つたんですか」と「駕籠は肩を入

れますと 虎「サア早く遣つて下ださい」昇「姉さんお前へさん歩行
 んですか」 虎「ハイ歩行ますよ」と

フシ「お虎は駕籠を急がせる 心ろは一刻千秋の思

ひ 後より追手は来やせぬ 捕へられては今ま

での 苦心は水の泡なりと心ろ焦くま、駕籠の

棒 後より押せば駕昇は

昇「姉さんお客さんは病人だと云ふぢやがんせんか其んなに急い
 で駕籠を動揺つちや悪うがんせう」とら「イ、エ急ぎさへすれば動
 揺たつて宜いんです」と云はれて駕籠昇は益々不審 昇「姉さん私

ら共は毎日倉田やの宅へは行つて居ますが未だ親分は弟の在る
 事は聞きやせんが」 虎「そうですか此方は江戸へ往つてましたん
 で」昇「へエそうでしたか」と

フシ「云ひつゝ急ぐ向ふより 灯燈點たる人群人數

得物くゝを引下て 足拵へも嚴重に 喧嘩支度

で二十四五人 駕昇は傍へ路を避け やり過し

つゝ見てあれば 八日市場の倉田屋身内 駕昇

は忽まち聲をかけ

かこ「エ、倉田屋の親分さんではがんせんか」倉「誰れだウム芝山の

駕籠六か何處へ往くのだ」鼻へエ親分の處へ弟さんに乗せて……」
 倉「何に弟を乗せて……」鼻へエ御病人だそうで」倉「オイ皆んな待
 て……其灯燈を此方へ持つて来い」鼻「モシ姉さん倉田屋の親分
 さんでげすせ」虎「ハアそうですか之は親分さんでございませうか
 妾はお虎でございませうが先刻母を差し上げましたがお分りになり
 まして」倉「オヤ之れはおとらさんでございませうか初めてお目に懸り
 ます先刻はお母さんを以てお知らせ下だすつてありがとうござい
 ます之れから喜三を取り返しに行くのてございませう」とら「アノ喜
 三さんは此處に居ります此駕籠の中に」倉「エツ喜三が……何うして
 虎「ハイ妾しが之れ……斯うして」と

フシ「語るを聞いて倉田屋が 女の身ながら大膽な
 男子も及ばぬ其度胸さ 感心なしお虎を賞め
 然ば一と先づ引揚よこ 人數を率ひて倉田屋は
 駕籠を守りて引返し 八日市場の倉田屋で 醫
 師と迎へて喜三郎が 疵の療治と看病は お虎
 母子が夜る晝るともに 煎じ薬りや看病の 利
 めは早く喜三郎が 疵所は頓に癒たれば お虎
 母子の悦びを 共に喜ぶ倉田屋夫婦 お虎は最

早安心して 倉田屋文吉の世話に寄り 來湖の
主人に抱へられ 又も手に取る三味線の 藝者
勤めの一と稼ぎ

却説此方は佐原の喜三郎でございます疵が癒つて一度佐原へ歸へ
りますと子分共が是非仕返へしの切込みを掛けたいと逸りまする
を喜三郎は未だ身體が不快と云つて之を止めて居りましたが之
れは喜三郎の腹中に期する處ろがありますからで或日只一人八日
市場の倉田屋へ参いりまして義兄の文七に向ひ 喜サテ兄き私ち
も身體が全快なつたから今夜芝山へ切込うと思ふので種々御心配

を懸て有り難うごせやした」文「ウムさうか宜かろう今夜あたりは
：乃公も一緒に往う」喜「有り難うごせへますが夫ればつかりは止
して貰へたへ子分の者が皆んな一緒に往きたがるのを實は欺して
出て來たんですから何うか私ちを一人で遣つておくんねへ」文「そ
うか成程夫れなら其うするが宜い：オイおくに喜三がの芝山へ今
夜往くてへから酒の支度を仕て呉れ」くに「オヤそう夫れはお目出
度：早速支度を仕て遣りませうと
フシ「聽て持ち出す酒肴 勝負を祝ふのし昆布 敵
を打豆かち栗や 重ねる酒の盃の 數も三々五
々に割り 敵を刺身に塩焼は 只た一切に鯉魚

節 掛て出したる菜びたしや 其名を世間に揚
 豆腐 群がる奴をばなます切 互に祝ふて喜三
 郎 別れを告げて乗り込むは 夜露も深き芝山
 の

仁三郎の宅でございませうが仁三郎の方でも初めの内は大概佐原からキツと斬込みを掛るだろうと要心をして居りました處ろが未だ喜三郎の身體が不快と云ふのを探りましたので

フシ「夫れでは喜三も手懲りして 仕返しをする勇氣もないか 弱い奴ぢやご侮りて 油断をする

のは大敵よ 夫れに付け入り喜三郎が 芝山の
 仁三郎を討取お話しは 此後ち出ました其時に
 委しく言上いたします

佐原喜三郎 終

大前田榮五郎

浪花節俱樂部口演

1 大前田榮五郎

フシ「丸くとも 一と角あれや人心ろ 風に柳で渡
る世を 茶にする中にも何處やらに 締くゝり
ある瓢箪の 徐々歩行氣散じの 旅は道連三人
が 文化の七年七月中旬 久宮の貸元丈八を
討つて立ち退く榮五郎が 關東一と名を揚げろ

其俠客の一席談

伺ひまするお話は上州一の俠客大前田の榮五郎で連中が入り代り立ち代り御機嫌を伺ひますが何づれも皆な俠客ものでお話しが高尚に参りりませんで下司張て居て誠にお聞き苦しいございませうが御勘辨を願ひます此榮五郎と云ふ人は上州は南瀬多郡大前田村の名主で田島新之丞の忝久五郎と云ふ人の次男で田島榮五郎と申ます母親さんはお清と云つて六十一歳で死去しましたが榮五郎は寛政五年丑の二月の生れで明治七年二月二十六日八十二歳で死去いたしました之れで榮五郎のお話しはお終ひ……生れてから死ぬまで云つて仕まつたから夫れぢや面白くも可笑もない之れへ辯者が

粟だの麥だの稗だの大豆小豆砂……砂などは不可ないが種々雑駄な加てを交せてお客さまに食させるのであります浪花節でありますからお腹を痛めて腹下しや赤痢になるやうな憂いはありません代りに聞き苦しくつて夜中にうなされるかも知れませんが併し命には別條ございませぬ之れだけは受合ます……浪花節を聞いて命を取られては堪らない……榮五郎の兄を揚吉と申まして盲人でこそあれ中々の強膽者で加之に極癖の宜い人で四里半あります前橋へ杖も突ずに子分に胸箱擔がせて毎日通つたと云ふ位ひな盲人で人々は盲人親分と申ました此親父さんの久五郎と云ふ人は腕力が有つて劍術は間庭の樋口十郎左衛門の門弟となり先生と五分までには

行きませんが三本に一本は取ると云ふ位い柔術も宜く取ります又
 角力が強うございまして瀧登久五郎と申ましたたが博奕打の仲間へ
 這入ました爲に遂々名主は退役となりました然れども御本人は平
 氣なもので其頃上州で有名な佐位郡大久保村に田中大八と云ふ賭
 博打がありました之れは上州で貸元の開祖でありまして人々は貸
 元とも云はず親分とも申しませぬ田中の旦那又は隠居と申ます其
 人の身内となりまして賭場口を三ヶ所も貰つて一方の貸元となり
 ましたが年五十三で死去なりました跡は揚吉と榮五郎が引受て居
 ります此榮五郎に兄弟分があります次田村の福田屋榮次郎と高崎
 の問屋場の親方で問屋の和太郎之れを三人兄弟と申ます然るに田

中大八が天保の三年三月に五十九歳で死にました跡へ同郡久宮村
 の丈八と云ふ者が賣り出して子分も澤山に出来ました
 フシ「夫れ故久宮丈八は 賭場口擴げを仕なければ
 子分を養なふ事出来ず 然ば子分に指揮て 他
 人持ち場も遠慮なく 益を擴げる亂暴に 大前
 田の子分共は 大いに怒つて榮五郎に
 子分「エ、親分久宮の奴らは亂暴にも此方の繩張へ益を敷やあがる
 巫山戯た奴等ですが之りや放擲ちや置かれやせんが親分和主さん
 さへ承知なりや久宮へ不意打をかけて丈八を打取めて仕めへます

が何うてございすへ」と子分が申ますと榮五郎は穩當な人で最
も生れ性が子と丑が交つて居りますから穩やかです其代り憤つた
てば千丈の堤も突破る勢ひがあります榮「待て〜腕を突張のは
何時でも出来る田中の親父が死去なつた跡へ出た丈八だが己等の
繩張は親讓り位へは知つてるだろうからマア騒ぐな俺も了簡が有
るから」と云つて子分を慰め

フシ「其の翌日は榮五郎が 土産物をば調のへて

長脇差も差さずして 一人赴むく久宮村 來た

つて見れば丈八が 門に掛けたる損料の 貸し

夜具蚊帳の札を出し 片家業はボク除か榮五郎
は聽て宅に入り

榮「御免なさへまし」子「へエお出なせい」榮「貸元はお出でござい
ますか」子「へエ親分は居ります」榮「宜しう何卒……是りや誠に
詰らん物でございませすがホンの手札がわりに 子「之りや何うも有
りがとう存じます」子分は奥へ来て 子「親分大前田の榮五郎が來
ました」子「何に大前田が來た」此方へ通せ」子分は再び出て參い
りました」子「サア何うぞ此方へお上なすつて下へ」榮「御免なす
つて下下さい」と子分の案内で奥へ通りました 榮「之れは貸元今
日は……」子「イヤ大前田能くお出だサア此方……唯今はお土産を大さ

に有り難う存じます」榮「イエ何うもお禮で恐れ入りますホンの手札がわりで」處ろへ子分がお茶を持って来る榮「何うも有り難とう」
 丈「時に大前田何にか用かい」榮「左やうで：他の事ぢやございません早速貸元にお話しが有つて出ましたが：實はマア子分の奴等の云ふ事だから當には成りませんが何んだか其：貸元の御身内が私しの南瀬田郡へ足を踏み込んだとか踏み込まねへとかマア混々云つて参いましたたが白痴な事を云へ久宮の貸元に限つて然んな事が有るもんか夫りや汝達が聞き違へだらうと斯うマア：申て取り敢へず伺つたのでございませが：マア貸元の事で然んな事有りますまいが次第に寄つたらお身内衆がナニ大前田なんぞは青二

才だから何にをしても宜いと云ふ了簡で私しの繩張へ一里と二里を踏み込んだのではあるまいかとサ：マア私しは思ふんですが萬一然んな事があつたらば貸元から榮五郎の野郎は未だ年は若かへし弱い者責めに當るから止よ：とお前へさんが聲を懸てお呉んなさりや其う云ふ間違へもあるめいし又私しは混々する事を見たり聞たり爲るのは嫌やな性分でげすから此りやマア鳥渡お話しに上つたのでございませが：「丈」成程：否夫りや大前田：子分の了簡で遣つたんぢやねへ丈八が指し圖だ：と云ふのは田中の隠居がねへ後ちには段々乃公の身内が殖へて来て中々當然への賭場口斗りぢや飯んならねへから追々賭場口を殖やして往かなけりやアなら

ねへ夫りや南瀬田郡であろうと利根郡の沼田の源藏が繩張であろ
うが上州一國は此丈八が兩方の足の下に踏まへて右と左りの手を
舉りや駿甲信の三ヶ國まで手を伸して丈八の繩張に爲やうと：マ
ア斯う云ふ了簡なのだ其れだからお前への方でも遠慮はねへから
此丈八の繩張へドン／＼持ち込んで来るが好いちやねへカエ大前
田「榮夫りや親分不可ねへ和主さんと私とは人間の貫目が違う
相撲の番附にして見りや和主さんは大關で私ちや幕下の横禰かつ
ぎ到底角力にやならねへ：和主さんの方から私ちの繩張へ踏込ん
で来てても何とも云ふ事は出来ねへが私ちの方から和主さんの繩張
へ踏み込みや和主さんは黙まつて居るとしても御身内が承知を爲

なさるめい夫れこそ飛んでもねへ騒動になるんだ」丈八「夫りや大前
田仕方がねへ博奕打は勿論腕つこ勝負で賭場口を擴げなけりや男
子にやなれねへ」榮「夫りや貸元然う云へば然うだが賭博打は腕つ
こ勝負で打たり張たりして賭場口を擴げるんだと云やあ夫れまで
だが：今日上つたのは決して其喧嘩に来たのぢや無いお話しに来
たんだから和主さんと口論したからつて何んにもなる譯のもんぢ
や無へから和主さんが腕つこ勝負で男子に成るんだと云ひなさり
や夫れで一が十終たのだ：マア是れツ切りお話しも仕ませんが併
し重復も云ふ通り今日は私ちは話しに来たんですからマア莞爾り
笑つて別れやせう：腕つこで男を磨くと云ふんなら大前田も嘴し

は青いが場合に寄つたら貸元腕つ競勝負で一番遣ろうぢやござい
 ませんか：然かし今日は此儘お別れ申すから大きにお八釜敷と
 ございました：皆さんお免なせい」と榮五郎は
 フシ「暇を告げて立ち歸へる 後見送つた丈八が
 ベロリと舌を吐き出して 薄生意氣な青二才
 玉子の殻も取れないで 上州一の此乃公の 鼻
 を挫に來やがつたと いけ巫山戯たる身知らず
 めこ 云ふを聞いたる子分等も せゝら笑つて
 生意氣な 腕づく勝負で遣ろうとは 龍のあざ

この髭を撫 玉を覗へる白痴者 上州一の親分
 の 對うを張るこは片腹か 兩腹痛んで臍が茶
 を 熱すを止めて飯を炊くこ ドツこ一同に大
 ほ笑ひ

此方は榮五郎は大前田村へ歸つて來ますと丁度兄弟分の福田屋の
 榮次郎と問屋の和太郎が來て居りました 福「兄き何處へ往つたん
 だへ」榮「オヤ之りや能く來なすつた何に乃公丈八の處へ鳥渡往て
 來たんだ」福「止すが宜いや彼んな分らねへ尻の穴ん處へ往つたつ
 て無駄だ：何に爲に往つたんだ賭場の一件だろ」榮「然うよ」福「

何にが彼の野郎に分るもんかむく犬みたいな野郎だ其癖威張だけは知つて居やあがるが野郎は何んと云たへ」榮「ウム彼奴ア是れこれ吐かしやがつた：餘んまり胸つ糞が悪いから押つ始めやうと思つたがマア我慢して歸つて来た」福「左うか能く兄きや我慢して歸つて来た」此話しを火鉢の前で聞いて居た兄の揚吉が「榮五郎汝へ能く我慢して歸つて来た：誰か居ねへか：」子「盲親分何んでげす」揚「駕籠を一挺然う云つて来い」榮五郎は之れを聞いて「兄き何處へ往くんだ」揚「何處へ往くもんか汝へは己の一人の弟だ汝へが羞を搔されて来て己が黙つて居られるもんか丈八の處へ往つて出ように由つちや野郎の脇腹を突き通さなけりやあらねへ」

榮「マア兄き止てくんねへ和主目も見へねへ癖に：夫れが目盲滅法界と云んだ」後ろに居た和太郎に榮次も「文「マア揚兄き止しね兄いせへ我慢して歸つて来たんだ和主も止しねへ」と三人して止めました此揚吉は人並外れた疝癩持ちの揚吉が火のやうに成つて憤りました之れを慰めて榮五郎は「榮「兄き己鳥渡往つて飲で来るから」揚「ウム然うしねへ」」榮「兄き何處へも出ちや不可ねへよ揚「モ一何處へも行きア仕ねへ和主達が留るのを振り切つて往くやうな揚吉ぢやねへから心配爲ねへで飲んで来い」と誠に兄弟思ひであります：」

フシ「大前田の榮五郎は 福田屋榮次と和太郎の

二人を連れて南惣社の料理店 和泉屋おきんの
二階へ上がり 酒や肴を取り寄せて 三人互ひ
に酌みながら 飲む盃は順逆の 話になつて榮

五郎

榮「倍て兄弟 揚兄きの前で云と亦た心配を掛けなけりや成らね
へから黙つて居たが實に業が煮て堪らねへから野郎を生かしちや
置けねへ：是れから丈八の野郎を叩切つて仕まはふと思ふんだ野
郎を殺らして仕まやア上州一の貸元と云はれた丈八も白子屋のお
駒に嫌はれた丈八たア違つて己も土地を賣らなきアならねい夫れ

に就いちや心配になるのは盲目の兄きだが何分にも揚兄の處を二
人へお頼み申たへお世話を頼みます」和「夫りや兄き不可ねへ和主
と三人は三國誌の玄德關羽張飛ぢやねへが生れた時や別々でも死
ぬ時は一緒に爲ようと七八つの少年の時から兄弟に成つて此年ま
で何處へ行くにも三人一緒に往き三人兄弟と人にも云はれて居る
ぢやねへか：和主が其氣なら及よばすながら腕を貸さうぢや無か
三人で」福「三人で遣つ付て仕まはう又國越をするなら一緒に仕や
うぢやねへか」榮「夫りや有りがたへ話したが夫れでは二人へ氣の
毒だ」福「氣の毒てへのは兄き他人行儀だ和主の兩の腕は己等二人
だ己の兩の腕と云つたら和主方二人ぢやねへかお互に持つ持れつ

爲るのは當然へぢやねへか」大前田は涙だを流し「ア、誠に有りがたへ和主達が其う云つて呉れるなら三人で丈八を殺らして仕舞ふ夫れぢや然うして：時は何時が宜かろう」福「待ちねへ：此二十四日が清正公さまの縁日だ此混雑紛れに殺つて仕まはふ」榮「夫れが宜かろう」と

フシ「互ひに相談調のふて

日暮方まで汲みかはし

宅へ歸つてお互に

二十五日の夜を待ちぬ

宅

へ歸つた榮五郎は

兄に向つて是れくご

覺

悟を語りて國越を

仕た其の先へ落着ば

直ぐ

に手紙で便りする 若しも便りの無い時は 私
しが死んだと斷念らめて 跡とを宜ろしく頼み
ます 云へば揚吉潔きよく 確かに遣れよ跡の
事 心配するな引受た 無職渡世の意氣地は強
く 弱い者なら助ろよ 強い者なら何處までも
向うへ廻つて張通せ 意地ご我慢は乃公達が
敵ご戦かふ武器なるぞと 兄弟互ひに手を取り
て 不覺涙だに暮六ツの 鐘は何時しか時も經

ち 二十四日の夕暮れを 待つ甲斐もなく丈八
 が 要心堅固な其爲めに 折角謀つた企だても
 残念なるかな水の泡 落膽なしたる三人を 慰
 さめ諫める揚吉は 今日に限つた事じやない
 時節を待てよ三人と 云はれて各々其の覺悟
 時の至るを松の月 影は何時しか山の端に 落
 て闇夜も十五日 月夜も同じく十五日 月日の
 経のは早いもの 時は文化の七年よ 月は七月

八日の夜 飛び込み來つた福田屋榮次
 福「オイ兄き明日から次田村明神のお祭りで丈八の野郎が出張て
 盆を敷が何うだ遣つ付ようぢやねへか」榮「夫奴は宜い機時だ遣つ
 付るとも」丁度問屋の和三郎も來合せ居りまして「和「オイ福田屋
 和主人處へ集まろう」福「宜いとも夫れで何んだせ向が這入て來て
 からぢや乗込譯にや往かねへから兎も角も俺ん處へ明日の朝早く
 來てくんない」宜しと云ふので榮五郎と和三郎は次田村の福田屋榮
 次の宅へ集まりました先づ此處の宅に忍んで居りまして夫々準備
 を仕て愈々十一日の日に成りますと大きなお櫃へ飯を一杯詰めま
 して五布蒲團を一枚宛持て竹筒ぼうへ水を入れて銘々充分に仕度

を仕て次田明神の椽の下へ夜る忍び込みました。秋七月の事です。椽の下は涼しくつて好いが夜るも晝るも蚊の出るのには降参したビシヤク叩く譯にはならず：

フシ「サア来い來たれと三人が 待つて居るとは神ならぬ 夢にも知らぬ丈八は 祭りの當日十三日 早やく出張つて裏門と表ての二門に子分を配置 用心厳しく堅めたは 大前田の人数が寄せたなら 此處で嚴しく防がんこ 備へたるのも馬鹿くし 敵は早や 内懐ろへ入りしとは

知らぬが佛の丈八は 冥土へ門出は程近かし

劔の山は眼前たり 修羅の巷の戦場は イデヤ

是から初まらん

然う斯うする内に其日も暮れ段々夜も更けて彼れ是れ九ツ時分に相成りますと博奕場も少し閑暇に成つて参いました。此時椽の下に居ました三人 榮「サア時刻だ支度しろ」と榮五郎は滑皮はの襦きを掛け千草色の股引に甲掛草鞋單衣に小倉の帯を胸高にめて紺縮緬の鉢巻した榮次和太郎も身仕度を嚴重に爲て腕に覺への一刀を引提三人は拜殿の下から這出しました。

フシ「栗の毛毬は嚴重でも 内ちから破れちや堪ら
ない 裏と表てを嚴重に 固めを付け丈八は
油断大敵懷中に 在るとは知らず博奕場の 客
は僅かに四五人よ 夫れを眺めて丈八が子分に
酌させグビくご 盆を白眼で飲んで居る 此
時間屋の和太郎は 客に負傷をば爲せるなよ
己と榮次は周圍から來たる奴等を切り立ん 兄
きは構わず丈八を 遣つて仕まへ三人が 三ツ

に別れて飛び出だし 賭場へ進んだる大前田

四邊に響ご大音に

榮「ヤイ丈八汝や外時ぞや云た事たア忘れや仕まへな大前田の榮
五郎が腕つ競勝負で男に成りに來たんだ汝が素首貫へに來たんだ
覺悟を仕ろへ」と

フシ「長曾根小鐵の一刀を 抜くより早く切り付け
れば 子分は一同に立ち上がるを 福田屋榮次
と和太郎は 妨害立てするな蚊蛉蜻めら 片つ
端から死人の山 築いて吳んご大勢の 中を目

掛て前後に分れ 切込むうちに榮五郎は 丈八
 目掛て切付れば 前へなる膳を投げ付るを 體
 を替せば膳は飛び 此間に丈八傍はらの 長脇
 差取つて立ち上がるを 透かさず切り込む榮五
 郎が太刀先き 二た太刀三太刀合せたが 榮五
 郎が術や勝りけん 受け損じたる丈八は 肩先
 き野深に切り込まれ アツこ一聲後ろなる 駒
 箱の上へ倒れたは 六道錢を掴み取り 死んで

も忘れぬ慾皮 乗し掛つたる榮五郎は 胸元一
 と突留めの一刀 差すや直ちに首打落さし 首
 差上げて大音上

榮「久宮の丈八を大前田の榮五郎が討取つた」と呼はりますと裏
 門と表門に集まつて居た子分どもと和太郎と榮次は此聲を聞いて
 勢ひ猛く切り掛ますから丈八が子分共は蜘蛛の子を散すが如く皆
 な散々に逃げ失せました榮五郎は夫れ駒箱を擔いで往けど和太郎
 は駒箱を持つて三人は駈けドシ／＼／＼息も繼ずに宙を飛んで三
 里十一丁あります八幡山まで逃げて來ました三人はホツと一息つ

いて「榮」ア、驚いた咽が乾いて仕やうがねへ」と傍らの清水之れは山から落ちて来るので、之れを飲んで咽の乾きを止め八幡山の石段を上がり、鉾から竹を三本切り取つて八幡山の上り口の處ろへ此竹を三叉に組で其真中へ丈八が首を突通し「榮」之れなら何處からでも見へるだろう」福「見える共サア金子を分やう」と其處へガラ／＼と明けて誰れが幾許だ何んて然な者たれた事たあ仕ねへ好かげんに引摺んで銘々の胴巻の中へ入れ「榮」縁があつたら亦た逢ふ然んなら榮次：和太郎：何卒無事で居て呉んねへ」三オ、合點だ然んなら御機嫌やう」と三人は

フシ「八幡山で別れを告げて 思ひ／＼に落ちて行

間屋の和太郎は後に日光の鉢石へ逃げて暫らく隠れて居りましたが博奕行狀で御用便になり惜しいかな牢死をしてしまいました夫れ故榮五郎が關東一の大親分に成つた事を知りませぬ福田屋榮次は引返へして次田村の己れの宅へ歸つて來ると親父が「何うした旨く往つたか」福「親父さん旨く遣付て仕まつた」親「そうか夫奴は好い鹽梅だ」福「就いちや阿父：我も國越を仕なくつちや成らねへが直歸つて來るから機嫌よく爲て居てくんねへ此處に金が十兩あるから置よ」親「乃公ア小遣ひは要らねへ汝へは旅を爲るんだから持つて行け」福「マア宜いてへ事よ別に邪魔にや成らねへんだ

…取つときねへちや乃公ア往くからの」親待てく汝へ一人で國越をしちや不可ねへ」一人で往ちや不可ねへたつて年を老つた和主を連れて往かれるもんかな」父何に乃公ちやねへや汝へに尾いて往きてへと云ふ者があるんだ」一へエー誰れが」父誰ぢやねへ汝へが末妻のお作を連れて往かなくつちや不可ねへよ」一申戯云ひなさんな人を殺して國越をする者が嬬アなどを連れて行かれるもんかな阿父は随分悠氣な事を云つてらア」父夫れだつて置て往かれちや困るよ乃公が怨まれるからなア」一だつて阿父未だ女房にしたと云ふんぢやなしさ其内好い亭主を持たせるが宜やナ」と云つたが親父は何んとも答へず

フシ「外へ飛び出し程もなく 連れて歸つた作兵衛

が 娘のお作が手を取つて サアサア亭主こ一

緒に往けと 云はれて莞爾お作女は 榮次が傍

へこスリ寄つて ユレナアモシへ榮次さん 妾

しも一緒に何處までも 假令野の末へ山の奥

虎伏す谷間も厭やせぬ 主こ一緒に居すならば

竹の柱らに茅の屋根 木の葉布團に石枕 食す

に居ることも構やせぬ 云はれて榮次も仕方なく

榮「夫れぢやお作連れて往きもするが艱難辛苦は覺悟だらうな」
 作「夫りや好いともね豫ての覺悟でさアねー夫れぢア阿父さん往
 つて來ますよ」と何んだか芝居でも見に往くやうな随分呑氣な夫
 婦でございます之れから二人は諸所を巡ぐつて後に甲州市川へ足
 を留めまして四年間居る中に八州の角伴佐十郎旦那の最負に成り
 上州へ歸つて前橋に住居して目明しとなり飛鳥を落す福田屋とな
 り此榮次が歎願に由つて榮五郎が四十二の時に國へ歸つて永住が
 出來たのでございます

フシ「偕ても大前田の榮五郎は 八幡山で別れてか
 ら 上方筋を心ろ差し 流れくゝて美濃國 神

大前田榮五郎

戸の宿で政右衛門 大貸元の世話になり 名前
 を變へて勝五郎 然るに文化八年の十二月二
 十日眞夜中に 代官三原幸作を 討つて立ち退
 榮五郎木曾の山路の雪深き 道を逃げ行くお話
 しは 此後に御機嫌伺ひます



大正二年三月二十二日印刷
大正二年四月七日發行

俠客銘々傳奧附

口演者 浪花節俱樂部

發行者 中村惣次郎

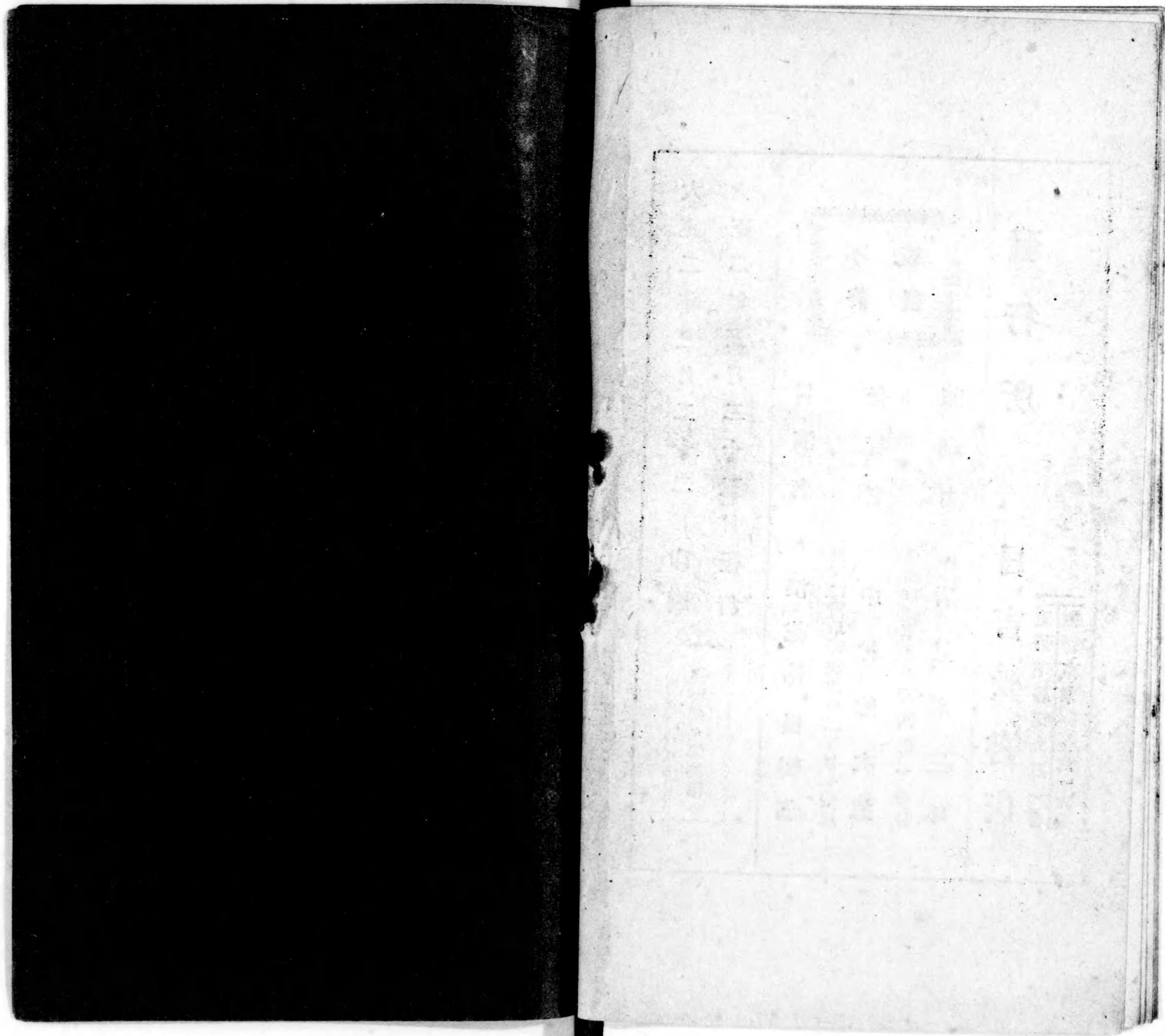
印刷者 岩見米三郎

不許複製

發行所

日吉堂書店

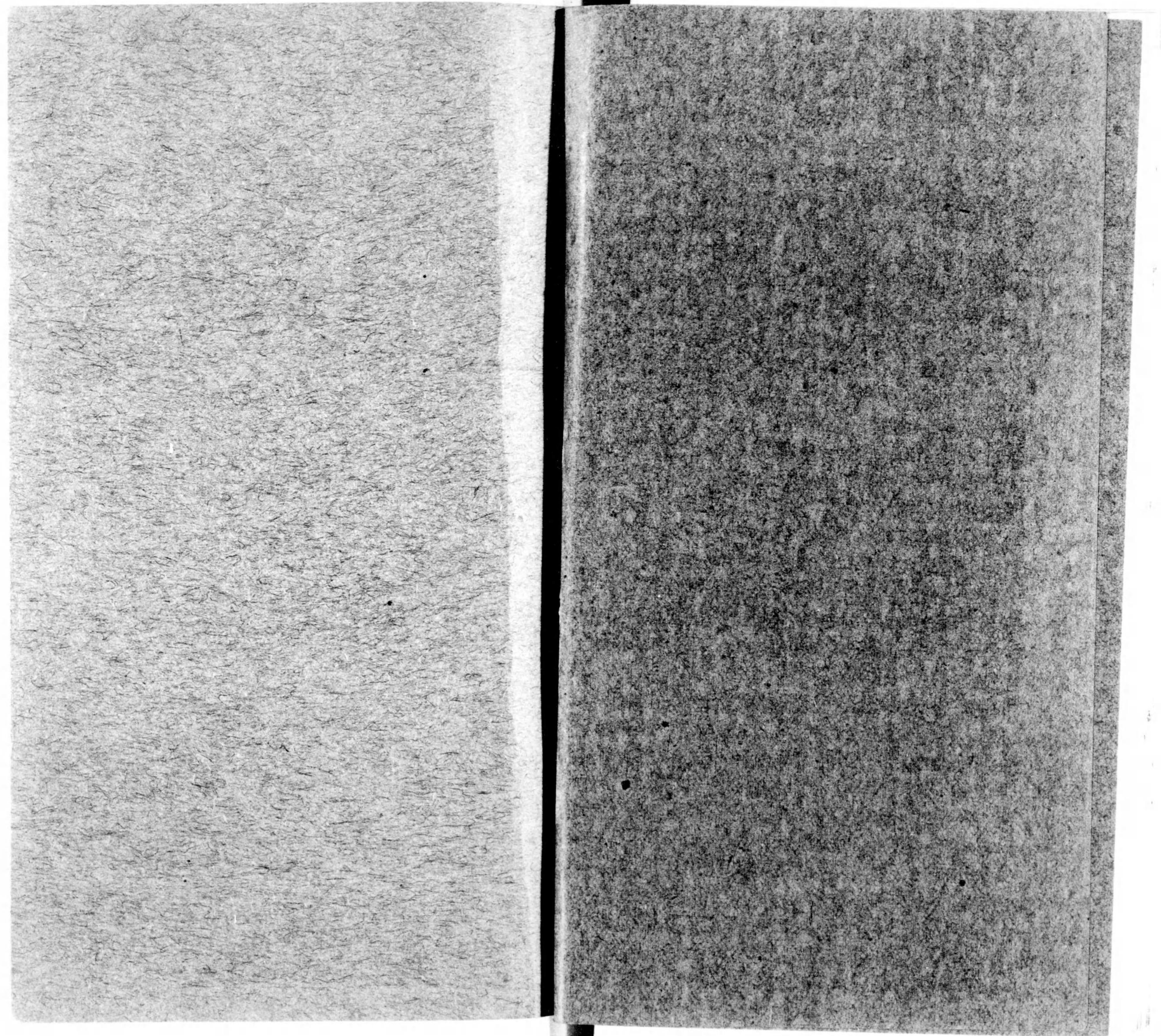
電話下谷四九三一番
振替東京一一六一六番





270

837



終

